山口は待ち合わせの居酒屋に入ると先に到着していた田村のボックス席に着いた。

田村は仕事帰りで、黒のスーツ姿で座り、彼の前にはいつもの焼酎の梅割りが置いてあった。田村は山口が以前勤めていた介護老人保健施設の事務長であった。しかし、山口が退職する前に異動となり、今は施設の系列病院で事務長をしている。田村は角刈りに近い髪を後ろに流して固め、眉を細めに剃っている。その容姿は、任侠映画の役を地でいけるようなオーラを醸し出していた。この風貌からして、田村の仕事を病院の事務長とは誰も思わないだろう。

二人は毎月一回のペースで飲んでいた。この飲みが始ったのは、二人が同じ施設で働いていたとき、二人が同郷であることを知り、齢も近いことから――田村が三つ上だった――互いが自然に距離を近づけようとし始め、「飲み」が始まったのである。

山口はこの飲みを続けていくうちに、田村には遠慮無く思いの丈を打ち明けている自分がいることに気がついた。山口はこの飲みを無くしたくないと切に思っていた。

「よう」田村は山口に言った。

「どうも、お疲れ様です」山口は田村の向かいに座った。注文を取りに来た店員からおしぼりをもらうと、山口は中生を頼んだ。

「お前、新しい施設の仕事はいつからだっけ」田村が尋ねた。

山口はおしぼりで手を拭きながら言った。「明日からです。今日は制服をもらいに施設に行って、見学もしました」

「そうか」田村は焼酎を飲むと、たばこを取り出し、火をつけた。「で、見学した感触はどうだった」

「まだ何とも言えませんが、案内してくれた総務の人からは職員の質が低いと言われました。でも手を抜いている感じはしません」

「ちょっと見ただけじゃ分からないからな」田村はたばこを吸い、煙を吐き出した。「まあ、そのところは、いずれ分かるだろうよ」

「あと、あまたの施設同様、手不足感があり、余裕が感じられませんでした」山口は見学で目にした食事介助を思い出していた。

店員が中ジョッキの生ビールを持ってきた。店員は山口の前にジョッキを置いた。

二人は乾杯して、それぞれの酒を口にした。

「余裕がないと」山口はメニューを取りながら言った。「業務優先の傾向になってしまう」

「もつ煮を頼んでくれ」田村が言った。

「はい」山口はメニューを見ながら言った。「あと刺身頼んでいいですか」
「ああ」
　山口は店員を呼び、もつ煮込み二つと刺身の盛り合わせを注文した。
「業務優先か……」田村が焼酎を飲みながら言った。
　山口はたばこに火を付け、笑みを浮かべながら煙を吐き出した。
　田村が山口の表情を見て怪訝そうな顔で言った。「なににやついてんだ」
「田村さんの言葉を思い出しますよ」
「ん？　どんな言葉だ」
「二人が施設にいた頃『おい山口、現場を業務優先にするんじゃないぞ！　利用者中心に考えて実践しろ！』ってね」そう言うと山口は顔をほころばせた。「何度言われたことか」
　田村の表情が自然と緩んだ。「当たり前だ。人は慣れが生じると基本をおろそかにしてしまうからな。常に言わなきゃならん」
　山口は生ビールを飲んだ後に言った。「常に利用者本位」
「だな」
「でも」
「でも何だ」
「介護福祉士として利用者本位に基づいて専門的サービスの提供は当然ですが、それを実践できるためのマンパワーの確保が必要です。やりたいけど、それに見合う人数が揃わずにやってしまうと、理想と現実の乖離で心身ともに疲弊してしまいます。結果として質の低下が如実に表れてきます」
「じゃあ、どうする。人手が足りなければ、昔からよく言われる三大介護、食事、入浴、排泄だけをすればいいのか」
「仮にどうあがいても三大介護しか手が回らないのなら、それも仕方ないと――」
「何だよぉお前」田村が呆れるように言った。「それじゃ職員側の都合じゃないか。サービスの提供を抑えれば、職員はきつい思いをしなくて済む。その代わり利用者はどうだ、その環境に黙って我慢するしかないのか」
　山口はたばこを吸い、たばこを見つめながら言った。「時折、ふと思うことがあります。自分たちは本当に利用者本位で介護を提供しているのだろうかって。もしかしたら単なる自己満足で終わっているような気がします」
「なぜそう思うんだ」

「職員は、仕事で介護というサービスを提供しています。あくまでも仕事としてです。タイムカードを押して仕事に入り、仕事が終わればタイムカードを押して帰る。今日も事故なく決められた業務スケジュールを遂行できた満足感を感じながら……でもその満足感には利用者の思いに対して実践した満足感が含まれているのか疑問です」
「そうなのか」
　山口は残りのビールを一気に飲み干した。「分かりません」
「そうか」田村はテーブルに置いてあるスタッフの呼び出しボタンを押した。「でもな、はっきりしていることがある」たばこを吸い、煙を吐き出した。「目の前で関わっている高齢者を単なるいち利用者として見るなよ。一人ひとり生きてきた歴史が違い、生きてきた道のりも違う。十把一絡げにするな。それを忘れるなよ。いち利用者と感じてしまったら、もう介護の仕事はするな」
　その時店のスタッフが注文を聞きに来た。田村はスタッフに手のひらを見せ、待つように伝えた。スタッフは伝票を持ちながら頷いた。
「いいか」田村は話を続けた。「利用者本位なのか単なる自己満足なのか悩むのはいいことだ。疑問は解決への一歩だからな。しかしな山口、悩むときは自分中心で悩むなよ。主語を自分じゃなく利用者にして考えろ。お前が悩んでいる時、利用者も苦しんでいるかもしれない事を忘れるなよ。それを忘れないために利用者を主語にして考えろ。利用者がどう考え、悩み、苦しんでいるか、もしくは満足しているのか。解決する課題の軸には常に利用者を入れろ。利用者がいてこそ、お前たちの存在意義がある」
「確かにそうですね。それと――」
「ちょっと待て」田村は山口の話しを止めた。
　田村は注文を待っているスタッフにビールと焼酎を注文した。スタッフは笑顔を見せ離れていった。
「いいぞ、何だ」
「施設側が言っている利用者に安心、安全な生活環境の提供。確かにこれは必要不可欠なもので、それは求めるものではなく、当たり前のこと。利用者が切に求めているものは、自分のあるべき姿、今まで生きてきた自分なりの生活を要求している。それに施設側は耳を傾けているのかどうなのか」山口はたばこを灰皿で揉み消した。「自分らしい生活を取り戻すことは――」
「山口よお」田村が山口の言葉を遮った。その口調は低く、重く感じられた。黒スーツに

任侠映画の主人公を地でいけるような面立ちが山口に威圧感を感じさせた。山口は反射的に姿勢を正すほどだった。「お前が言ってること、それは利用者から聞いたことなのか、それとも単にお前が感じたことなのか」
「いえっ、聞いていません」背筋を伸ばしたまま即答した。
　田村はゆっくりと背もたれに寄り掛かった。そして大きくため息をついた。
「会話しろ」田村は背筋を伸ばしたままの山口に言った。「お互いが接点も作らず、コミュニケーションを図っていないから、常に悩むだけで次に進めない。確証が持てないから結果が見いだせず、欲求不満になっているんじゃないのか。利用者に聞けよ、言えよ。お互いの気持ちをポケットから出して相手に見せろよ」田村はたばこを挟んだ手で、山口を指しながら言葉を続けた。「確かお前、前に言ってたよな」ドスの効いた声で言った。「介護福祉士は利用者の代弁者だって、そう言ってたよな」
「はいっ」山口は未だに背筋を伸ばしたままで即答した。「日本介護福祉士会の倫理綱領で謳っています」
「だったら利用者の話を聞けよ。そしてお前が利用者の代わりに言え。俺達利用者は不条理な環境に置かれていると感じていると言えよ。それが行動というものだ」田村はたばこを吸い、煙を吐き出した後、灰皿でたばこを消し始めた。「代弁者の役割を全うしろ。さあ、やることが山積みだな。でもな諦めるなよ、悩み苦しんでいる利用者のために全力を尽くせ。以上だ」
　その時、注文したもつ煮込みがテーブルに届いた。
　田村が箸を取り、口元に笑みを浮かべ、箸でもつ煮込みを指しながら言った。「今の俺はもつ煮を食べるのに全力を尽くす」田村はもつ煮に箸を延ばした。「まあ、最初はあまり片肘張らないようにしろよ」
　山口は不動の姿勢を取ったまま田村を見つめていた。

　翌朝、小久保は六時過ぎに起こされた。ここの施設の業務スケジュールから言えば利用者を起こす時間だった。小久保自身はすでに目が覚めていたが、ベッドの中で横になっていたのである。
「おはようございます」夜勤に入っていた男性職員が小久保に言った。
　男性職員の名前は関口といい、やや細身の身長は一八〇センチを超える長身だった。
　小久保はベッドに取り付けてある柵を使い、一人で起き上がり、ベッドの端に腰掛け

た。関口は窓へ向かいカーテンを開けた。朝の日差しが殺風景な部屋を照らした。関口は小久保の前に近づいて来た。「お手伝いしましょうか」
「結構だ」
「分かりました。では、お着替えが終わりましたら食堂に来てください」
「今から食堂に行って何をするんだ。まさかラジオ体操でもするんじゃないだろうな」
「体操はしませんよ」関口は笑みを浮かべながら言った。「食堂で朝食を待っていただきます」
「朝食は何時からだ」
「七時半です」
「七時半？」小久保は床頭台にある小さな置き時計を見た。置き時計は六時三十五分を指している。「今から朝食を待てと言うのか。まだ七時にもなっていないぞ。この時間に食堂へ行かなければならない理由を教えてくれ」
　関口は少し困惑した表情が浮かび上がった。相手から予想もしない質問が出たため、即答ができず、つかの間の沈黙が部屋に流れた。
「朝食までにモーニングケアや朝食の用意などの事を済ませるためには、今から利用者さんを順番に起こして食堂に連れて行かなければならないんです」関口は言葉を止め、小久保が納得したのか様子を伺った。
　それは自分で食堂まで行けない者が対象だろ。それにお前達の都合で連れて行くんだろ。小久保は言葉には出さなかった。「俺は自分で済ませて朝食までには自分で食堂に行く。俺に構うな」
　関口は小久保が挑戦的な態度を感じ取り、いったん距離を置いた。昨日入所したばかりの小久保とはまだ深く関わっていないことで小久保の性格を把握できていないため、無理に話を引き延ばすことは避けた。「分かりました。もし手伝いが必要なときは遠慮なくおっしゃって下さい」
「なら、この施設から出ることを手伝ってくれ」
「はい？」
「何でもない。自分でできるからもう行ってくれ」
　関口は頭を軽く下げ、部屋から出て行った。

　小久保は朝食を摂る時間となり食堂に入ると、同じテーブルの男三人はすでにテーブル

についていた。小久保はテーブルにつくと男達に挨拶をした。藤田と織田が挨拶を返したが、小久保の正面に座っている男は頭を軽く下げただけだった。

職員の関口がお茶とおしぼりを持って小久保に近づいた。「どうぞ」そう言うと、小久保の前にお茶とおしぼりを置いた。

その時、食堂の入り口に配膳車が到着した。配膳車には利用者の朝食が載せられていた。職員達が配膳車から食事を配り始めた。提供された朝食は、白ご飯に味噌汁、焼き鮭と卵焼に五目煮だった。小久保が自宅で生活していた時の朝食はいつもトースト二枚とサラダにコーヒーだった。小久保は目の前に置かれた朝食を食べ始めたが、わずかに口にした程度で箸を置いてしまった。

その様子を見ていた藤田が言った。「もう食べないのですか」

「昨日から食欲がないし、俺が毎朝食べていたのはトーストだ」

食堂で利用者を見守っている女性職員が、小久保が食事をやめたのに気がつき、そばに近づいてきた。小久保とは初対面だったため朝の挨拶のあと自分の名前は大村と伝えた。

「どうかしましたか。ほとんど食べていませんけど」

「下げてくれ、食べる気がしない」

「体調でも悪いのですか」

小久保は施設パンフレットの謳い文句を思い出した。自分らしい生活の提供。

「そうだ、次から朝食はトーストを出してくれ」

「えっ？」

「トーストだ。焼き目がついたパンだ。俺は毎朝トーストを食べるのが習慣だ。そしてトーストには北海道産のバターをまんべんなく塗ってくれ。それが浦和で生活していた時の日課だ」

「ここでトーストを出して欲しいという事ですか」

「北海道産バターを塗ってな」

大村はしばらく考え込んだ。二年近くここで非常勤として働いていたが、今までにトーストが出た覚えがなかった。「多分、今までトーストが出たことはないですね。ちょっと確認してみます」そう言うとステーションの方へ歩き出した。

しばらくすると、他の女性職員が小久保に近づいてきた。背が高く、身体は締まっていた。長い髪はヘアクリップを使い、後ろでまとめている。

「おはようございます」女性職員が小久保に言った。多少笑顔を見せていたが、その声は

感情が伝わらない平坦な口調だった。
「おはよう」小久保も彼女同様、平坦な口調で返した。
「挨拶が遅れました。初めまして、二階フロアで介護の主任をしている佐藤といいます。宜しくお願いします」
　小久保はゆっくりうなずいた。「小久保だ」
「ええ、知ってます」佐藤はうなずきながら言った。
「では、俺が朝はトーストを食べたいことも承知かな」
「ええ、今聞きました」
「北海道産バターを塗って」
「ええ」
「じゃあ話は簡単だ。明日からの朝食はトースト二枚とサラダを用意してくれ。できればトーストは薄くなく厚めで。厚めが無理なら、そこは妥協しよう」小久保はテーブルにいる男達を見た。「どうだ、トーストが欲しい者は」
　男達は首を横に振った。
　小久保は佐藤に顔を戻した。「一人分」
「無理です」
　小久保は背もたれにゆっくりと寄り掛かった。「なぜだ」
「パンがいいなら、朝食時にはご飯でなくパンを出すよう厨房に伝えておきます。ただしトーストではなくロールパンになりますが」
「俺はパンをオーブンで焼いたトーストのことを言ってるんだ。ロールパンが食べたいとはひと言も言ってない。勘違いしないでくれ」
「お出しできるのはロールパンのみです」
「それにサラダ。ドレッシングはフレンチ」
「あの――」
「そして食後のブラックコーヒー。砂糖抜き」
「聞いて下さい」佐藤の口調が荒くなった。
「なぜロールパンは出せて、トーストは出せないんだ」
「厨房ではパンをトーストする時間が取れないからでしょう。そこまで提供できる余裕がなくできません。ですからロールパンをお出しします」
「できない、ではない。まずはできるように工夫することを考えろ。パンフレットで謳っ

ている自分らしい生活の提供だ。俺の自分らしい生活の一つは朝のトーストだ。できるだろ」
「まあまあ、小久保さんよ」二人の会話を聞いていた織田が言った。「出されたものを黙って食えってことだ。俺たちには選択する権利はない」そう言うと、織田はフンっと鼻から息を吐き出した。「刑務所のようにな」
「もう、織田さん！　変なこと言わないで」佐藤が眉間にしわを寄せながら言った。
「教えてくれ」小久保が言った。「俺達がここで自発的にできることはあるのか」
「ありますよ。施設の許可さえおりれば」
「刑務官のな」織田が再び吐き出すように言った。
　佐藤は織田を睨みつけた。
　小久保は織田を指しながら佐藤に言った。「彼の言うことはまんざら間違えじゃない。俺達に自由はない。自由を抑制されている。まるで言動を管理された国民のように」
　佐藤は肩で大きくため息をついた。「とにかく、現状では無理なのを理解してください」そう言うと男達に背を向け、サービスステーションに戻って行った。
「小久保さんよ」織田がにやけながら言った。「あんた、あの刑務官の班長さんに睨まれちまったな」
　小久保は何も言わず佐藤の後ろ姿を見続けた。